

## カザフスタン共和国アルマトゥ州における牧畜業と資源利用の変遷

### Historical changes of the pasturage and the natural resource use in Almaty Region, Republic of Kazakhstan

渡邊 三津子<sup>1\*</sup>

Mitsuko Watanabe<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup>総合地球環境学研究所

<sup>1</sup>RIHN

20世紀において、中央ユーラシアの国々は、ソ連邦による社会主義的近代化とその崩壊という大きな社会変動の波にさらされた。特に、ソ連時代の開発は、本地域に暮らす人々の生活様式、地域社会、経済、資源利用の仕方を変えたと言われている。本研究では、統計データや公文書の解析、地域住民へのインタビューに基づいて、カザフスタン共和国アルマトゥ州における20世紀以降の牧業と土地・水資源利用の変遷を明らかにする。

分析の結果、本地域における20世紀以降の牧畜業と土地・水資源利用の関係は、以下のようにまとめられる。

ソ連時代直前には、本地域の牧畜は天山山脈内の草原とイリ河畔の草地の間を季節的に移動する牧畜スタイルが7割以上を占めていた。ソ連時代には、飼料の採草と畜舎飼育を基本とするソ連式畜産の導入や機械化がはかられ、カザフの伝統的な牧畜スタイルは変化した。

しかし、資源利用という点においては、ソ連時代初期にはまだ、採草地としてイリ河畔や産地の天然草地が利用されていた。この状況に変化が生じたのは1960年以降である。1970年カプチャガイダム湖建設や「飼料以外」の栽培用地の増加により、次第に天然草地が減少し、その不足を補うために飼料栽培用の灌漑農地が開拓された。さらに、通年的に畜舎で飼育される乳用家畜・家禽の飼養頭数増加は、飼料需要を増加させ、さらに飼料栽培面積の拡大を促した。このような流れの中で、河畔草地はダム湖へ、扇状地は灌漑農地へと対象地域の土地被覆は大きく変化した。1991年にソ連邦が崩壊し、1992年から相次いでコルホーズ、ソフホーズなどの生産組織が民有化された直後には、本地域における牧畜・農業生産は大幅に縮小した。

本研究で明らかになった土地被覆変化は、本地域における水循環に影響を与え、結果としてイリ河末端のバルハシ湖の湖水位変動に影響を与えたことが、共同研究者により指摘されている。

一方、ソ連崩壊後も状況の悪化が続いたアラル海問題に比して、本対象地域においてはバルハシ湖の消滅など、決定的な生態環境破壊は起こっていない。

その理由として、ソ連式生産体制が解体したのち、流通システムが失われたために、自給自足的な経営が多く創出されたことがあげられる。これらの自給自足的経営の多くは、生産性向上や経営規模拡大を追求していないために、結果的に「低環境負荷」で「持続的」な畜産が実現したといえる。しかし、社会体制の転換から20年を経た現在、現在の自給自足的経営者の次世代に関しては、都市へ流出する例も多い。非生産者層の拡大は生産性重視の畜産の増加を促す可能性があり、現在の牧畜や資源の在り方は転機を迎えている。

以上のように、生業や資源利用の在り方は、社会や開発政策の転換に応じて短期間でも大きく変化する。今後、人と自然の相互作用を考える上で、人間社会の変化に対する視点を持つことが重要であろう。

本研究は、総合地球環境学研究所・研究プロジェクト『民族／国家の交錯と生業変化を軸とした

環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷（代表：窪田順平）』による成果の一部である。

キーワード:人間社会,資源利用,社会主義的近代化,環境史

Keywords: human society, the use of natural resources, Socialist Modernization, environmental history